談話室

第10回国際触媒会議

島田広道

化学技術研究所 〒305 つくば市東 1-1

(1992年8月3日受理)

The 10 th International Congress on Catalysis

Hiromichi SHIMADA

National Chemical Laboratory for Industry
Tsukuba, Ibaraki 305

(Received August 3, 1992)

1992年7月19日から24日(6日間)にかけて第10回触媒国際会議がブダペスト(ハンガリー)で開催された。本会議は，4年に一度開かれる触媒作用に関する世界最大規模の国際会議で，今回は44ヵ国から900名以上の研究者が参加した。日本からは産官学合わせて約100名が参加したが，これは米国の144名に次ぐもので，フランス(88名)，イタリー(78名)，ドイツ(77名)などのヨーロッパ諸国よりも多く，日本の触媒研究者の層の厚さを示している。開催地が東欧ということもあって，開催国ハンガリーはもちろん，CIS，ポーランドなど古くから触媒研究の盛んな国から多くの研究者が参加したほか，ラトビア，クロアチアなどからの参加者もあり，国際色豊かな会議となった。

会議は，6件の特別講演のほか，

① 触媒反応機構・理論
② 清浄表面上での触媒反応
③ 触媒調製にかかわる新手法・新原理
④ 触媒キャラクタリゼーション，新技術の応用
⑤ 触媒-担体相互作用・助触媒の効果
⑥ 新規触媒材料
⑦ アルカンの活性化
⑧ 新規高選択性触媒・有機合成用触媒
⑨ 工業触媒・活性低下・触媒再生
⑩ ゼオライト触媒の化学
⑪ ゼオライトおよび関連化合物による触媒反応
⑫ 水素化精製触媒
⑬ 選択酸化触媒
⑭ 炭化水素の触媒反応
⑮ 燃料の改質触媒
⑯ 酸塩基触媒
⑰ 環境触媒
⑱ 合成ガス反応用触媒
⑲ 光触媒・電極触媒

の19セッションから構成された。各セッションは5～6件の口頭発表(⑲はなし)と10～30件のポスター発表からなり，総発表件数は口頭105件，ポスター364件にのぼった。したがって，連日朝早くから夜遅くまでのきわめて多忙なスケジュールであったが，口頭・ポスターいずれの会場でも活発な議論が行われ，会議は非常に盛況であった。会議の規模が大きいだけに，論文の申込締切から会議までの時間が長く，必ずしも最新の研究成果が数多く報告されたとはいいがたいが，触媒全分野の研究者が一堂に会する機会だけに，そこここで最新のデータを交換したり，また旧交を暖める場面がみられた。

全体的印象として，会議は非常に手際よく運営されていた。特に“音楽の国”ハンガリーだけあって，Social Events にはふんだんに質の高い音楽が盛り込まれ，参加者を十分に堪能させてくれた。

旧共産圏崩壊後間もない東欧での国際会議であったが，会議そのものは先進国での会議となんら変わることはなかった。ただ，比較的早くから自由経済を取り入れたとはいえ，国全体の経済状況は決して恵まれているとはいえず，老朽化しても手入れのされていない建物が数多く見かけられた。また，町中で見かける食料などの値段は驚くほど安く，レストランも観光客相手のものを避ければ西欧の4分の1程度の値段で十分に食事が楽しめた。しかし，インフレは激しいらしく，一年前の物価はほとんど参考にならないということであった。特に，ホテルなどの宿泊費の高騰は著しく，ドル建て，独マルク建てのところも多いようであった。また，この1，2年間で治安も相当悪化し，この点では西欧の都市と変わらないとの話も聞いた。

会議の Proceedings は 1993 年上半期に出版される。また，次回の会議は 1996 年に米国ボルティモアで開催される予定とのことである。